

◇巻頭随想◇

読書不足症候群と治療法

土木工学科教官 土 居 威 男

いま、わが学園に不思議な怪物がのさばっている。それは若き学生諸君の知的好奇心を食い荒す怪物である。この怪物の正体は不明である。だが、この怪物に乗り移られると「読書不足」という症状があらわれることは確かである。そして厄介なことに、この症状は直接命にかゝることがないので放置されがちなことである。一度この怪物にとりつかれると、なかなか退治できない理由もここにある。

しかし、これをしっかりと退治しておかないと「人間性豊かなエンジニア」を目指す諸君に重大な後遺症が残ることを憂へるものである。

読書不足になるとどうなるか。具体的な症例は次の4つである。すなわち、

- ① 知的好奇心の低下 ③ 発想力、構想力の無さ
- ② 論理的思考力の不足 ④ 表現力の幼稚さ

である。

①についていえば、知的好奇心がないから読書しないのか、はたまた、読書しないから好奇心が低下するのか、ニワトリと卵の関係がある。それでは、知的好奇心は何によって生ずるのか。

それは、もっとよりよくなりたいという「向上心」(これは「ハングリー精神」でもある)と、「問題意識」のあるところに発生する。初めに述べた怪物の正体は「向上心」と「問題意識」の無さかも知れない。

高専は大学と一味ちがった実践的技術者を養成する高等教育機関である。高専の卒業生に要求される能力は、第1に、問題を見付け出しそれを解決する能力、第2に、日進月歩の技術を自ら獲得できる能力、である。この2つの能力の基礎となるのが、知的好奇心、論理的思考力、構想力、そして表現力ではなからうか。

読書不足症候群のあらわれている者は、産業界からお呼びではないと覚悟すべきである。

怪物退治の妙薬と治療法はいたって簡単である。ただし強い意志と当初はかなりの忍耐を必要とする。それは、「月に最低2冊の本を読む」ことである。それに要する費用は月に小遣の15%の本代である。安上がりな方法は「図書館の徹底的利用」である。まさに図書館は読書不足症候群を治療する総合病院である。

机や製図板に自分の名前を落書きするのなら、この総合病院のカルテである「Book Card」に堂々と署名を残して貰いたいものである。

そして我が福島高専から、妙な怪物が一日も早く退散することを祈っている。

目 次

巻頭随想	1	読書ア・ラ・カルト	9
読書のすすめ	2	新着図書目録	17
私の読書	7		

読書のすすめ

◇人間小生豊かな技術者◇

機械工学科教官 佐藤 新太郎

私は4年前のビブリアの巻頭言で、読書は「心の糧」であり、友人であると書いた。読書というものは人に無理にすすめられていやいやながらするものでなく、自分で読みたい本を楽しんで読むのが自然であろう。

諸君は技術者になるために高専に入学し、勉強している筈である。そして高専では「人間性豊かなエンジニア」になるよう望まれている。専門的な能力もさることながら、それ以上に、誠実に精一杯に生きていくとして、自分の人生を豊かにすべきであると考え。

「豊かな人間性」は決して先天的に与えられているものでなく、自らが育てていくべきものであろう。自己中心的で、劣等感を欺瞞するようなつっぱり、怠惰がもたらす空虚な心、若い感受性のみじんも感じられないしらけた心で生きている限りは、いかに頑張ってよくしている積りでも、周囲からみれば鼻もちならないオゾンとしかみえない。貧しい、わびしい人間性を持った人なのである。

「豊かな人間性」とは、絶えず自分の心を啓発し、自然と人を愛していけるような心の広い人格であると私は思う。このような人間性を自ら育てるには、読書は欠くことのできないものである。多くの先生がいくら読書をすすめても、依然として多くの高専生は本をあまり読もうとはしない。一体、自分の人生をどれだけ大切にしているのかと思うと、寒心に堪えないのである。

さて、それでは読書でもするかという気になったとして、一体どんな本を読めば良いのだと思う人も多いのではなかろうか。確かに本を選択すること自体が難しいかもしれない。本屋の書棚には本が氾濫して私などは目まいを覚えるほどである。その中から自分の求めている本を探しだすのは、甚だ骨の折れることである。ベストセラーなどは一般的に良書であろうが、必ずしも自分が巡り合いたい本ではないかも知れない。しかし、読書はまず本を手にかざることから始まる。先生や友人がすすめる本でもまず開いてみるのがよい。

もし、それが不幸にして理解しにくい、おもしろくない、読むのが苦痛だとしたら、無理しないで、別の本を探したらよい。図書館には、これでもかというほど多くの本が君を待っている。精読でも、粗読でもよい。自分のペースで読むことである。だんだんと読書力が養われ、読書の楽しさ、喜びがわかってくるだろう。それだけ人間性も、より豊かになってきているのである。

今は、就職の求人のため、よく企業の方が来校されて話す機会が多いが、異口同音に「何はともあれ、まず人物です」とためらいなく話される。つまり、心の豊かな人、やる気のある人が望ましいということである。

多くの本を「心の糧」として読書によって「人間性豊かな技術者」をめざして精進していきたいものである。

◇マイクロ技術への挑戦◇

電気工学科教官 大次 信義

さる6月1日は、天気予報を始めて100周年記念日にあたるそうである。NCナインの天気予報解説者倉嶋さんは、当時の予報を「そっこうじょ」「……」「……」と3回繰返すと何を食べてもあたらぬといわれていたと笑いながら話しておられた。人工衛星、コンピューターを駆使して予報を出している現在でも時折台風などの進路予報を誤り、漁船など遭難、惨事を起こすことがある。気象予報官の方々は「……もっと高速コンピューターさえあれば……」と悔んでおられるとの話を聞く。現在気象予報を出すには、地球上に無数の観測点をとり、各点での大気の流れをコンピューターで計算している。この点と点との距離を現在の十分の1にできれば、台風の進路を数Kメートル以内の誤差で予報が出せるそうである。しかし、点と点の距離を十分の1にすれば、大気の変化も十倍の頻度で計算する必要があるため、計算量は全部で現在の千倍となる。現在でも計算に約1時間要しているため、計算量が千倍となれば当然千時間(41日)必要となる。これでは予報どころの話ではなくなる。また、夢のエネルギー

◇色彩について◇

工業科学科教官 小磯 武文

といわれる核融合開発でプラズマの計算がある。プラズマの計算には条件を1つ変えただけでも大変な計算量の増大となる。こゝに高速コンピューターがあれば核融合の実用化が2050年といわれているが、その時期を10年早めることができると予測されている。その他経済情報関係、地震予知などの分野がある。以上のような分野では、現在のコンピューターでは余りに遅すぎるのである。コンピューターの計算速度を高めるにはコンピューターの中核をなす超LSIの計算速度能力を高めなければならない。現在のシリコン素子では限度である。このため新素子の研究開発が進められてきた。10数年前ガリウムヒ素化合物即ちジョセフソン素子の開発に成功している。ジョセフソン素子とは、氷点下2百数十度という極低温下で突然電気抵抗がゼロとなる。このジョセフソン素子の計算速度はピコ秒単位である。いまこのピコ秒単位をめぐって日米半導体開発競争が熾烈である。さてピコ秒とは、1兆分の1秒のことである。光は1秒間に地球を7回り半するが、その光が僅かに0.3ミリメートルしか進めない極微の時間である。

超LSIの1応の定義は「4ミリ」とか「5ミリ」角の小指の先ぐらいのシリコンのチップの上にトランジスタ、ダイオード、抵抗などの「素子」を詰め込んだ数、いわゆる集積度が10万以上のものをいっている。半導体はコンピューターの記憶装置(メモリ)として組み込まれている。このメモリの記憶容量が半導体の集積度の伸びにつれ驚くべきスピードで伸びている。メモリが1つの信号を記憶する単位をビットという。そしてこの記憶された情報を自由に書いたり消したりできる能力を持つメモリをRAMといっている。いま日米貿易摩擦の1つの柱である64KビットRAMの超LSIには6万4千の記憶容量を持ち、10数万の素子が載っている。現在ではさらに256KビットRAMが量産態勢に入りつつある。

開発研究面では、既に4メガビットRAMが射程距離にあるといわれている。この4メガビットRAMはアルファベットや数字など大変な記憶量を持つ。さてこの配線の太さは1ミクロンとか0.1ミクロンとかいわれる。例えばこの超LSIを後楽園野球場の大きさに拡大したと仮定したとき1ミクロンの線の幅は2センチメートルの幅になるという。即ち後楽園野球場に2センチメートルの幅の線で配線が行なわれていることになる。以上のように今後半導体の技術開発とはこのようにマイクロ技術への挑戦である。

私はだいぶ前ですが、ビブリアに「アニリン」という題で書いたことがあります。それは、私が工業化学科の5年生に「有機工業化学」という科目の講義で固苦しい話の合い間に、余談として話す「科学小説」の題名なのです。私の専門が染料や色材に関係しておりますので自然とそんな話が多くなる訳です。そこで今回も亦、色について述べたいと思うのです。

はじめに私達の身のまわりを見て下さい。おそらく何十、何百という色が私達の生活にうるおいを与え、それらが私達の心を落ち着かせ、活気づかせ、心を躍らせ、沸きたたせている筈です。若しこれらの色彩が消えていったら……と思うと、私達は平然と座っていられなくなるかも知れません。あとに残るのは無色の恐怖の世界ですからね。私達の住んでいる現代社会は太陽光線がもたらす自然の色から、人間のみが持ちうる文化の色(人工の色彩)に支えられていることに気がつくでしょう。もはや現代の生活では色彩なしには考えられないのです。プロ野球の白熱の巨人-阪神戦も白黒テレビでは、何となくもの足りなくなること受け合いです。

ところで、色とはなんであろうか。有名な作家であり評論家であった小林秀雄氏は「近代絵画」という本の中で次のように述べております。「大きな太陽の光は地球に衝突して、砕け散り、地球全体を麗しく彩色している。太陽の光は地上に達する前に無論空気に衝突するから壊れる。空中に色素も顔料もあるわけではないが、空は澄めば澄むほど深い青になる。丁度、波の大きなうねりは小さな岩を呑み込んで進むが、小さな波は小さな岩にも衝突して砕けるように、光のうちでも波長の短い青の波が空気分子にぶつかって散乱しているからだ。紺碧の海も水の分子に関する同じ理由から紺碧にみえる。日の出や落日が真紅に染まって見えるのも、その場合太陽光線は空気の中を特に空気分子より粒の大きい塵埃や水蒸気を含む下層の空気の中を長い間通らねばならず、そのために小さな波の散乱現象が強くなり、割合から言えば大きな波が沢山眼に這入って来ることになるから太陽は地平線に近づくにつれて黄から橙、赤と染って行くという風に普通説明されている。

光が最も見事に壊れると天空に虹の橋がかかる。去って行く夕立の無数の水滴がいわば天然のプリズムを作るからだ。そういう次第で花は紅、柳は緑といて

も花や柳に勿論そういう色を出す力があるわけではない。これも光の一種の壊れ方なのである。緑の葉にある葉緑粒は緑以外の光を食べてしまうし、赤い花びらにある色素は赤以外の光を食べてしまうからだ。(略)

モネは風景の到る処に色が輝くのを見た。影さえ様々な色で顫えているのを見た……。引用が長くなりましたが、小林氏は「色とは壊れた光である」といかにも文学者らしいとらえ方をしている、面白い表現です。

私達技術者の方では、白色光の一部を吸収した残りのスペクトルが色であるということになるのですが……。しかし、この表現も徹底ではありません。電子のエネルギーにまで立ち入らねばなりませんから……。いずれにいたしましても私達は色彩の中で生活を楽しんでいる訳です。これら色をつくり出す物質を研究し創造し、それらをたくみに使いわけて、私達の生活を

より豊かにしてゆきたい……というのが私達の希いでもあるのです。

終りにビブリヤの読者向きに日本の昔の人が色についてどんな関心があったのかの一例として次の文章を挙げておきます。

指貫は紫の濃き。萌黄。夏は二藍。いと暑き頃、夏虫の色したるも涼しげなり。

狩衣は。香染のうすき。白き。ふくさの赤色。松の葉色したる。青葉。桜。柳。又青き。藤。男は何色の衣も。
清小納言『枕草紙』より

参考文献

- 小林 秀雄 「近代絵画」 新潮文庫
矢島 鈞次 「色彩の魔術師たち」 弘済出版社
稲村 耕雄 「色いろは」 光文社

◇「1984年」の著者ジョージ・オーウェル◇

一人と作品一

一般教科(英語)教官 馬場 寛

英国の作家、ジョージ・オーウェルが今年になって、にわかに世の注目を集めている。今年彼の政治未来小説『1984年』が「予言満願」の年にあたり、ひろく内外の新聞、雑誌にとりあげられている。彼はわが国で、過去にさらに二度、話題をさらったことがある。彼の小説『動物農場』が世界第二次大戦直後、米国占領軍から日本での翻訳許可第一号であったし、昭和四〇年代の大学紛争後、彼の評論が好んで読まれたことがある。このように時代の節目と考えられる時機に注目を集めるジョージ・オーウェルとはどのような人物で、どのような作品をのこしているのだろうか。

オーウェルは、1903年、インド税官吏を父とし、英国の植民地インドで生れた。経済的にさほど裕福な家庭ではなかった。父は彼に夢を託し、上流階級の子弟が入る私立予備校に入れ、奨学金給費生としてイートン校に進ませた。が、彼はケンブリッジにもオックスフォードにも進学しないで、ビルマ(当時はインドの一州)に行き警察官の職についた。学友である富裕階級の子弟に対する経済的劣等意識によるものだったといわれている。彼はこの植民地生活で、英国帝国主義の一つの歯車として原住民を抑圧する罪の意識に苦しんだ。彼の小説『ビルマの日々』(1934年)はビルマの体験を基にし、人間が人間を支配する背理について述べている。

オーウェルはビルマ時代に背負った罪悪感を自国の労働者階級と一体となり、連帯意識をもつことによって清算しようとした。1927年、警察官をやめ、帰国し、ロンドン・バリーの底辺の極貧生活の中に、みずからとびこんでいった。『バリー・ロンドンどん底生活』(1923年)はこの体験のルポルタージュ的作品である。その後オーウェルは家庭教師、私立学校の教師、本屋の店員などの仕事をし、一方、文筆生活を送りながら貧しい暮らしをたてた。彼の作品は自伝的要素が濃く、主人公は作者の分身であり、その住む世界は身近な体験の世界であった。この時期の体験は、小説『牧師の娘』(1935年)や『葉蘭を絶やすな』(1936年)の中に生かされている。

ビルマやバリー・ロンドンの生活から、また英国炭坑労働者の実態調査をとおして、彼は資本主義の腐敗を確かめ、貧困問題と戦う社会主義者となっていった。『ウインガム波止場への道』(1937年)は、主として英国北部炭坑労働者の実態調査の報告と社会主義についての彼の考え方を述べている。オーウェルは、社会主義について、マルクス主義者のように資本家と労働者の二つの階級に対立させず、カースト制のように、英国に根強く残っている階級社会の下層階級への侮蔑をいましめ社会主義の実践は、この種の階級意識を解消することから始めよ、と説いた。「正義、自由、人間ら

しき」をよりどころとする社会は、労働者を必ず抑圧と貧困から守ってくれると信じた。体系的に極めて薄弱、また心情的でオーウェル独自の社会主義であった。一言でいえば、彼は自由主義者であった。

1930年代に入り、資本主義社会の生んださまざまな悪弊が表面に出てきた。それに伴いファシズムが世界的に蔓延し始めた。ファシズムと反ファシズムの抗争が、スペイン内戦という世界的な規模の紛争で爆発した。1936年7月、合法的に成立したスペイン共和国に対し、フランコ将軍らのファシストが武装蜂起し、ナチス・ドイツやファシスト・イタリアがこれを支援した。ヨーロッパの知識人や労働者は、ファシズムを共同の敵とし戦いに参加した。オーウェルは、知識人の多くが加わった共産党の国際旅団ではなく、たまたま、アナキストのPOUM(マルクス主義統一労働党)に加わった。彼にとって、この内戦はファシズムとの戦いであり、いずれの集団に入るかは問題でなかった。が、人民戦線内部に、派閥抗争がおこり、やがて、共産党が主導権を握り、スペイン共和国政府は、POUMを非合法化するに至った。POUM軍は「ファシストの手先」、「裏切者」の烙印を押された。オーウェルは咽喉に貫通銃創を受け裏切者として帰国した。

帰国してみると、英国の新聞、雑誌はスペイン内戦の真実を伝えていなかった。また、この内乱で彼はスターリン主義共産党の悪質なデマ宣伝、謀略、歴史の偽造をまのあたり見たことから、強い反撥と不信感をもち、共産主義の世界では、現実も、過去の事実も容易に変え得るものだと信じた。このことはすべてスペイン内戦のルポルタージュ的作品『カタロニヤ讃歌』(1938)の中に書かれている。独ソ不可侵条件が結ばれてからは、オーウェルはファシズムも共産主義も、ともに全体主義として一つに包含し、これと戦ってゆく姿勢をかためてゆく。彼の評論、「なぜ私は書くか」の中で「1936年以後私が本気で書いた作品はどの一行も直接、あるいは間接に全体主義に反対して書いたものばかりであり、私の理解する民主的社會主義のために書いたものである。」と語っている。

『動物農場』(1945年)はオーウェルが「政治的目的と芸術的目的を融合させようと試みた最初の作品」である。彼の全作品のうちで最も高い評価を受け、これによって彼は作家としての地位を不動のものとしている。この作品は動物の世界に託して専制的な政治権力のメカニズムを解き明かし、その退廃ぶりを諷刺した小説である。ある農場の家畜が叛乱を起して人間を追放する。智脳が勝れた豚が首脳部となり、それぞれが能力に応じて働く。馬は体力を使って肉体労働に従

事し、鳩は飛翔力によって革命の理念を宣伝する。この動物農場は、搾取者であった人間を放逐し、動物平等の理念に基づいて生れた理想社会である。が、時がたつにつれて支配者と被支配者の二つの階級ができてくる。遂にはすべてが一人の独裁者によって決定され、かつて人間社会の悪弊として除去したものが動物農場の機構の中に入ってくる。これは1917年、10月のロシア革命を諷刺した寓話であるといわれる。小説の中のナポレオンはスターリン、スノウボールはトロッキー、9頭の猛犬は国家秘密警察、スノウボールの逃亡はトロッキーの亡命、風車の建設は産業五年計画となり、登場人物、事件の対応からそれは明らかである。『動物農場』は、よくスイフトの『ガリバー旅行記』と比較されるが、ともに政治的諷刺をぬきにしても面白く読むことができる芸術性の高い作品といえよう。

『1984年』(1948)はオーウェルの全作品のうちで量的にみて最大の作品である。前作『動物農場』でソビエトのスターリン独裁政治の批判を、寓話風に書いたが、一般大衆には彼の意図を直接理解してもらえないおそれを感じたことが、この作品を書く一つの動機となったようである。『1984年』は、1948年に完成している。この頃の世界状況としては、1945年、ムッソリーニの逮捕、ヒットラーの自殺により、ナチス・ドイツが連合軍に降伏し、ファシズムは崩壊した。代って、イギリス国内では、平等主義を求める知識人、労働者たちが親ソ、親共産主義に傾斜していった。一方、東欧のユーゴスラビア、ハンガリー、チェコスロバキヤ、ルーマニア等の諸国が共産圏の中に入っていた。この共産化の傾向は欧州全域にとひろがってゆく勢いであった。先に、スペイン内戦で義勇兵として戦ったときに、共産主義の危険な本質を見ているオーウェルにとって、ファシズムに代るもう一つの全体主義の世界的傾向には、耐えられないものがあつた。従つてこの作品は、36年先の政治的未来図を書いたというよりも、彼が筆をとったその時代の世人への警告の意味が強く、完成した48年を単に逆にして題名にしたとみるのが妥当と思われる。

サミエル・バトラーという英国の作家が文明世界を離れたユートピアを描き、これを『エレホン(Erewhon)』(1870)という題名にしている。ErewhonはNowhere(現実にはどこにもないユートピアの意)を逆にしたものである。オーウェルは、この書を念頭におき逆ユートピアの意味でこのような題名にしたのかも知れない。

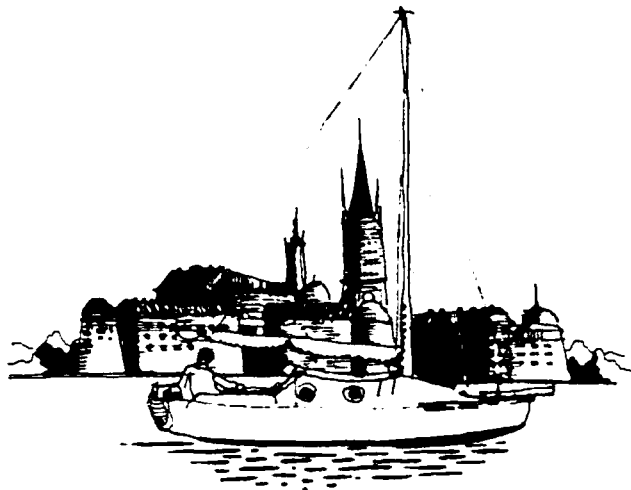
この小説の舞台は、全体主義国家のオセアニアの首都ロンドン。世界はオセアニア、ユーラシア、イースタシアの三超大国家に分割支配されている。オセアニア

アにはビッグブラザーという指導者のもとに一党独裁制がしかれており、放送も新聞も出版も政府の統制下にある。恋愛は禁止され、国民の私生活にいたるまでテレスクリーンで監視される完全な管理社会である。人民の85%を占める一般大衆はプロレと呼ばれ、無知で最低の生活を強いられる。オセアニアはユーラシアカイスタシアのいずれかと常に戦争状態にある。その目的は、相手を征服するよりも余剰物資を消費し人民を貧困状態におき、一党独裁体制を維持することにある。党の三大スローガンは、「戦争は平和なり。自由は屈従なり。無知は力なり。」である。主人公ウイストンは、真理省に働く職員で、その仕事は歴史の偽造である。党が何かの決定をすると、それに都合のわるい文献を全部探し出して書き改めるか削除してしまう。このように過去の事実そのものを党の決定に応じて変えてゆく。この仕事に対する疑惑がやがて、ウイストンを破滅に導いてゆく。同じように自分の仕事に興味をもてないジュリアという女性と恋をする。二人の関係を党に知られ、彼は厳しい拷問をうける。ウイストンは拷問と洗脳に屈服し、恋人ジュリアの愛を裏切り、やがてビッグブラザーと党を讃えて死んでゆく。

この作品は、全体主義的管理下においてロボット化され自由な意志をもつことができなくなったウイストンの逆ユートピアの世界を描いている。もしわれわれが民主主義的政治体制や政治信念を放棄し言論、思想の自由を失ってしまうとき、たちまち、逆ユートピアの悪夢的状况を招くことへの警告である。昭和二十四年、オーウェルの『動物農場』が、わが国において翻訳許可第一号となったのは、東西の冷戦状況が始まりつつあったときだけに、主としてこの書に反共の覚醒剤の効果を期待してのことだったと思われる。しかし、オーウェルのこの最後の二つの作品は、単なる反共のバイブルではない。

オーウェルは、いかなる手段によっても、「自由、正義、人間らしさ」がおかされる危険があるとき、つねに注目を集める作家といえるだろう。

- オーウェルの全作品……ペンギン文庫(原文)
『カタロニア讃歌』……現代思潮社(訳本)
『動物農場』……角川文庫(〃)
『1984年』……早川書房(〃)
『評論集』……岩波文庫(〃)



私の読書

不順続きだった今年の天候も、ようやく回復の兆しを見せ始めたようだ。梅雨明けの晴天を駆け下る薫風に、初夏の爽快を満喫しているうちに、何時しか涼風は熱気を孕み、かくて今年も、夏休みが近付いて来た。「熱帯夜」などという言葉に象徴される炎熱の責め苦が、早くも思いやられる此の頃ではある。

ところで、学生諸君は、夏の暑さを克服する極めて有効な方法があるのをご存知だろうか。

夏の猛暑をしのぐ「銷夏法(ショウカホウ)」にもいろいろある。山へ行くもよし、海へ行くもよし、軽衣を身にまட்டு、青畳の上に大の字に仰臥し、涼風を貪るのも又一法ではあろう。だが、そのいずれもが、ただそれだけのことである。夏の暑さを忘れることが出来て、然も、その後になんかの手応えさえも覚える「銷夏法」— それは読書を措いて他にはない。

若者の活字ばなれが叫ばれて久しい。しかし、高専の学生諸子に限って、今夏はそうした社会の雑音とは無縁の生活を送って欲しいものである。

「ビブリア」本号では、図書委員の協力を得て、各クラスから数名を推薦してもらい、各諸君に、読書の感想を執等してもらった。全校諸子は、学友の文章に刺激されて、大いに読書欲をかき立て、読書によって涼しい夏を過されんことを切望する次第である。

「ビブリア」編集子の願いは、ただ一つ、次の一文に尽きる。

‘Boys be bookworms.’

「車輪の下」を読んで

—私は自己発見の契機をつかんだ—

電気工学科5年 鈴木啓修

傑作と呼ばれる作品を読めば、ある程度作者について知りたくなる。そして一般に言われるその人の性格や行いが好ましくない場合、又は作品とのギャップが大きい場合、幻滅することがあるだろう。シェークスピアなんて人は、すばらしい作品を数多く残し、私も数作読んでみたが、肖像画を見ると髪が薄い成金貴族といった風体で、とてもハムレットやリア王と結び付かない。

ところで、「車輪の下」を書いたヘルマン・ヘッセは私にとって作品と作者のイメージの一致する数少ない文学者の一人である。

思えば、中学校の国語の時間に読んだ『少年の日の思い出』という小品もヘッセの作品ではなかったか？ 記憶が定かでないが、それ以外にも『デミアン』や『春の嵐』等、確かにヘッセは誠実で温和人柄だったことが読みとれる。

そのヘッセの自伝的な作品である『車輪の下』は、主

人公ハンスの心を押しつぶす教育・受験の車輪から逃れようとして、人生の苦難の渦に巻きこまれて、最後に死んでしまうという内容である。

中学校時代に読んだ人は、これから車輪に押しつぶされようとする自分の姿と重ねて読んだであろうし、この学校に入学してから読んだ人は、客観的に受験制度を考え直したり、中学時代をもう一度思い出したり、人それぞれの読み方のできる作品であると思う。又、この作品が国を越え時間を越えて読まれていることから、この作品による問題提起が若者にとっていかに重大であるかがわかる。

私も私なりの作品の捕え方をしたし、それは時間と共に変化した。中学の先生に勧められて読んだ時は、簡単に物語として読んだため、『ああ、こんな少年もいる。』と思っただけだったが、ある程度ヘッセの一生のようなものを知ってくるにしたがって、この作品は、主人公ハンスに自分自身の姿を重ね、もう一度作者の少年期を客観的に自分の中に位置づけようとしたのではなかったかと思った。

確かにヘッセもハンスのように勉強に明け暮れ、ドイツの名門校に入学するが、その厳格さに耐えきれず、また詩の魅力に囚われてしまい、学校を退学し家に戻

っている。これらのことから自分の少年期を改めて考え直しながら書いたのではないかと思うのである。

さて、最近と言っても、もうずいぶん前だが、その時の感じ方は、少し視点が違って、ハンスに向けられることがなく、ハンスを取り巻く環境に向けられた。

言ってみれば、ハンスは周囲の人々に期待されその重みにつぶされた。ところでハンスはそれをどのようなように思い考えていたか。おかしなことに、ハンス一人では、考えることも、知ることも、気付くことすらなかったのである。

つまり、ハンスは期待されることが普通の状態であり、自分の価値観も満足感もすべて周囲の人々が造ったものなのである。そしてその環境を離れ、新しい自分の思想を造る段階になって初めて、「勉強とは、今までの生活は。」と考えたのである。ハンスは結果的に自分を発見した。しかしそれからどうすれば良いか知らなかったのである。

さて、ここで自分の生活を考えてみると、ハンスが何も知らずに他人の価値観の中で生活していた状態と同じではないかと思えてくる。その価値観がマスコミによるものや流行によって造られたとしてもおかしくない世の中で、私は知らず知らずにハンスのように慣らされているのではないか。しかも、最も恐いのは、慣らされていることに本当に気付くことが出来ないということだ。不変的な価値観が存在しないかぎり、人間は自由に価値観を持って良いはずだが、現実には環境によったり、流行によったりして自分自身の主張は何もなかった、なんてことが起りうる。

私も、あと十ヶ月弱で環境が変わる。その時どのような変革が起るか、それはやはり人生のターニングポイントと呼ばれるものであるのは間違いない。

ラスト・コンサート

土木工学科4年 高木 久

この物語は、愛の物語である。私は文章という形で見にする前にまず映画でこの物語を知った。今から8年か9年程前に、知り合いといっしょにオールナイトを見に行ったときのこと、同時上映に《カサンドラクロス》を従えてこの映画(物語)は封切られていた。自分の幼さゆえに、見る前は、列車が出てくる《カサンドラクロス》の方に興味があった。ところがいざ見てみると、『ラスト・コンサート』には何とも言えない感激があった。当時の私がそう感じるのだから、相当の映

画(物語)だと思う。

この物語は、若い女(ステュラ)がなやましげな目をして、海岸に沿った美しい病院から出て来るところで始まる。病院を出るときにすれ違った40すぎの男は、医者に彼女の父親と間違えられ、彼女が白血病におかされており、あまり長くはないという事を知ってしまう。男(リチャード)が病院を出ると、ステュラは、バス停のそばに1人で立っていて男に話しかけてきた。

「私ステュラっていうの、あなたは？」

「……………リ、リチャードさ。」

この運命的な出逢いから2人は、お互いの心の中で少しずつお互いの存在感を確かめ始める。そして、リチャードが売れない作曲家という事や、妻子ある身だということ(この時までステュラはリチャードを父親としてみていた。)が分かってくる。一方、リチャードはステュラの病を気にしながらも、ステュラに精いっぱいのおやさしさと愛情をそそぎ、『ステュラに捧げる歌』を作る。(スクリーンでは、その曲をバックにヨーロッパの美しい海岸が流れる。)

やがて、白血病はステュラの體を刻々と着実に衰えさせていく。その影でステュラはリチャードとの結婚を夢見るのである。‘ステュラに捧げる歌’はパリで認められ、リチャードは初のコンサートを開くことになる。すでにその頃にはお互いの愛はゆるぎのないものになっているのだが、ステュラは、歩くことさえできない程弱り果てていた。

リチャードの初コンサートの日、ステュラはウェディングドレスに身を包み、病室を出てコンサート会場へと向かう。リチャードが精いっぱいの気持ちを込めてピアノの鍵盤をたたいたとき、ステュラ目からためどもなく涙が流れ落ちる。でも顔は精いっぱい笑っているのだ。リチャードはステュラがいることを認めるとよりいっそうの熱演をした。そしてステュラは2度と帰ることのない世界へと旅立ってゆく……。

今思えばあの時期にこのような物語に触れたという事は本当に良い経験だったと思う。もちろん、10歳そこそこで、この物語りの奥深い所などは分かるはずもないが、良かったという気持ちには変わりがなかった。何を今頃思い出してそんな事言ってるんだと言われるかもしれないが、この間『ラスト・コンサート』の本を手に入れた事がきっかけとなっていると思う。

男と女、その間にはさまざまな感情が入り乱れている。当然、気持ちの食い違いも起こるはずだ。だが、それを克服したとき、より強い絆で結ばれる。あたり前と言えばあたり前だが、この物語を読んでその事が再確認できたような気がする。

読書ア・ラ・カルト

作家のペンネームというものは、なかなか含蓄があって面白いものである。

明治の作家長谷川辰之助が親に「くたぼってしめえ」とどなられたのをもじって二葉亭四迷と名のつたことは良く知られた話である。又、「怪人二十面相」の作者江戸川乱歩も、本名は、平井太郎であるが、耽読していたアメリカの作家、Edgar Allan Poeに因んで筆名としたについては、推理小説ファンなら誰でも知るところであろう。

ところで、これに類した付け方のペンネームを持つ作家は、決して少なくない。それも、なかなか諧謔を含んでいるものが多いようである。例えば、次の作家の本名と、筆名の由来についてはご存知だろうか。

- | | |
|----------|----------|
| 1. 半村 良 | 4. 直木三十五 |
| 2. 佐賀 潜 | 5. 大仏 次郎 |
| 3. 久生 十蘭 | 6. 司馬遼太郎 |

答えはあえて伏せて置こう。知りたい方は、この「ビブリア」を隅から隅までお読みいただきたい。思わせぶりで、いささか気がひけるが、これも、当「ビブリア」を学生諸君に通読して頂きたい苦肉の一策とおぼし召してお許しあれ。呵呵……。

「雪国」を読んで

工業化学科1年 高橋 信哉

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」で始まる川端康成の小説「雪国」はあまりに有名である。しかし、僕は今までこの小説を読んだことがなかった。だからこの読書感想文を依頼されたのをきっかけに読んでみたのだった。

この小説の冒頭の島村が汽車に乗っている場面は僕の心に何かを感じさせた。しばらく考えているうちにそれが何であるかがわかってきた。それは、現在の日本ではほぼ忘れられたものといってよい「時間」ではないだろうか。この場合の「時間」とはただの分や秒などの現実的なものではなく、のんびりと旅を楽しみ、ゆったりとした気分と充実感と瞑想とにふけることのできる「時間」である。この小説を読んでいるうちにそんな「時間」を味わってみたいものだと思うようになった。

次に、この小説の中で描かれる駒子と島村との心の交流は、現在ではめっきり少なくなった、本当の純情な恋と言えらるだろう。駒子の島村を思う気持は駒子が

島村の宿に何度も何度も訪れたり、たいしたことでもないのに会いに来たりしたこと、また島村に「よい子だね。」と言われたのを変に誤解して泣いたりするような態度に見られると思う。島村も、駒子を純粋な気持ちで見つめるようなところなど、駒子への心引かれる様子もわかる。最近はやりの薄弱でかつ軽率な恋とは全くちがうこの何とも言えぬような純粋かつ純情な恋を読んだ僕には、何か良いものをあたえられたように思われるのである。ところで、この島村という男は小肥りでそれほどいい男とも思われぬのに駒子や葉子からモテるというのは、やはり女の人を引きつける何かがあるのだろうかと思う。

そして、この小説の最初の部分で葉子と駅長との生き生きとした会話は自然に葉子の心の美しさや人柄がうかがわれた。これも川端康成の表現技巧のたくみさからだと思う。表現技巧のたくみさは、他にも別のいたるところで見ることができる。その中でも最も際立ったものといえば、やはり色彩的な表現の鮮かさではないかと思う。葉子と夕景色の融け合った美しさ、駒子のほおの赤さとまっ白な雪の対比の美、その他数多くの色彩的表現がある。それら一つ一つは川端康成の色彩的な表現技巧のたくみさにより、ある時は鮮烈な美のコントラストとして描かれ、ある時はそれらをうまくブレンドして美しく表現されることにより、僕達読者の心に感銘と、強い印象とをあたえている。だから僕がこの「雪国」を読んだ時に、まるで心の中で映画でも見ているように鮮明にその場面が浮かんできたのだろう。正しくこの小説は教科の教材に使われて当然とも言えるくらい美しい小説なのではないだろうか。



なにか、感想文というよりは、本の紹介といったような感じになってしまった。やはり映画というものの力が強かったかもしれない。しかし、映画と文章の両方から1つの物語を見るという事もおもしろいと思う。

ユーモア溢れる青春小説

「俺たちの行進曲」

工業化学科5年 鈴木 淳

時は昭和29年。北陸は福井市の越前高校を舞台に、高校三年生達が繰り広げるユーモア溢れる青春の物語——が、この「俺たちの行進曲」なのだ。

「行進曲」という言葉を使っているのは、この小説の中心人物が3人の音楽部員だからなのであろう。さて、その3人とは、

ビーバーこと新井昇(クラリネット)

スカパンこと川崎伸治(トロンボーン)

小ラッパこと三浦和也(トランペット)

なのだが、彼らだって決してマジメな訳でも格好いい訳でもない。それにこの越前高校音楽部は、音楽部とは名ばかりで校長の方針で実際は野球応援専用楽隊なのだが、この3人組の自由に音楽している様子ときたら、実に楽しそうなのだ。例えば第2章で、ビーバーが修学旅行先で知り合った女の子が大大好き(手紙にそう書いてあった)『想い出のワルツ』をクラリネットで吹こうとするけど、スカパンと小ラッパが『チェリー・ピンク・マンボ』をやって妨害するくだりや、第7章で、新任の美人教師(なんと理工学部卒の数学教師なのだ)と『マイ・ブルー・ヘヴン』を合奏するところなどは、彼らが楽器を吹いている様が想像できる位実に生きいきしている。一体、今の日本では、ああいう音楽ってどこに行ってしまったのかなあ、と考えさせられてしまった程だった。

ところで、著者の有明氏は昭和11年生まれだそうであらう。ちょうど作中の高校生たちと同じ年代である。と言うか、当然、著者自身の姿も作品中に投影されているのだろう。この年代特有(?)の体験は、物語の中にも極めて実感に満ちた文体で綴られている。例えば、和也(小ラッパ)が小学生の時、進駐軍の野戦食料の配給があったくだりで、(こういう事を私は初めて知ったのだが)ハーシーのチョコレートの付いている晩飯の緑の箱を欲しがると和也の心境——それは著者自身の心境でもあったのだろう——などを読むと、改めて、日本は40年前に大変な事をしてかしたんだなあ、と思うのは私

ピブリア54

だけだろうか。

勿論、物語には3人組の他にもテン、チャンバラ、タイヤ、クマ、といった連中が出て来て、小ラッパが2年生の女の子を裏山に誘い出す事で賭けをしてみたり、プロ野球の登板は誰かを集団賭博をしたり、女子更衣室をのぞいたり、と珍騒動を巻き起こす。また、呉服屋の息子マルトクが、話題の女子生徒のおしゃれを1つ1つ細かく講釈してゆくところなどは抱腹絶倒に値する。(保証はしないけど)

まあ、この小説、別に私の様な読み方ではなく、単に青春小説として読んでもいいし、もし作中人物と同年代(48歳位?)の先生がいらっしゃったらノスタルジーに浸って頂くのもよろしいかと思う。(もっとうちの学校の先生方は勉強ばかりしてらしたのかもしれないけれど……)また、各章には『メモリーズ・オブ・ユー』『赤いサラファン』『聖者の行進』など、音楽のタイトルが内容をほのめかして付けられているので、音楽をよく知っている人はそっちの方から読んで楽しめるんじゃないかな。

少し(多少?)長くて(300ページある)、あの3人が一章ごと持ち廻りで主人公を務めていて、そして登場人物がほとんどアダ名で出て来るので読みづらいかもしれないけど、話はなかなか面白いので、一読をお勧めしたい小説だと思う。

「潮騒」

電気工学科1年 吉田 幸夫

今まで漫画本にしか興味がなかった僕が初めて読んだ文庫本が「潮騒」だった。150頁たらずの短編小説なので、あまり活字になじみのない僕にも読み終えることができた。良く本を読んでいると知らず知らずその物語に引き込まれていくということがあがるが、まさしくこの本は読者を引き込む内容をもっていた。

話の内容は人口千四百、周囲一里に充たない歌島という小島で四人の若者が恋愛という問題に本気でむかっていくという一見どこにでもありそうな話である。主人公の久保新治は一昨年新制中学を卒業したばかりでまだ十八歳である。彼の行動はどことなく自然に身をまかせるといふ感じである。いまだかつて女というものを考えたこともなかった新治が、夕暮れの浜辺で会った一人の少女の存在により、初めて恋というものに目覚めた。これだけなら一人の男と一人の女の関係にだけ終わってしまう。だが彼ら二人の間には二つの黒

い影がたたずんでいるのだった。川本安夫と灯台長の娘八千代この二人は最後まで新治たちの間をじゃました。どちらかというとな夫たちの行動の方が一般的な人間の心理をついているように思えた。なぜなら、彼らの行動は、常に自己のこのみ考え、どのようなことがあろうと目標にたどりつくまでは手段を選ばないという人間の本能にもっとも忠実な行動のように思えるからだ。だが、決してその行いが正しいといっているのではない。あくまでもそれは本能であって内にひめた魂を表面に出したに過ぎない。安夫には感情的になる性格があるのだ。それは親の権力や財力で育てられてきた者にとって当然の結果なのだ。それとは対照的に新治は、貧しい生活の中で苦勞して育ったので堪えるということを知っていた。決して自分から無茶をしようとせず常に自然を信じていた。このようにまったく性格の異なる二人が一人の女をめぐる争うのである。

だが新治はこの争いの中で二つの体験をした。その中の一つは、「嘘」である。彼はその性格からも分かるように今まで人をだますということをしたことがなかった。だがこの争いにより彼は安夫に対して生まれて初めて嘘をついたのだ。安夫が初江の婿になるという自慢をもちだしたため彼は日ごろの恨みをこめて彼にはめずらしい手のこんだ復讐をしたのだ。それは安夫に初江の写真を持っているのかと尋ねたのである。もちろん新治は安夫がそんなものを持っているはずがないことを知っていた。だが安夫は「ああ、もつとる。」と答えた。新治はこの言葉を聞いたとき心が幸福に満たされたにちがいがなかった。だが安夫は新治に対して同じ質問をしてきた。このとき新治は初江の写真を持っていた。しかし新治はあえて持っているとは言わなかった。新治のさりげない答え方に安夫は安心したはずである。なぜ彼は「持っている。」と答えなかったのだろうか。そう答えれば日ごろの恨みもはらせて今以上に幸福な気分を満たされたことであろう。僕なら迷わずにそう答えたはずだ。ここでのやりとりでも新治の性格が浮き出される。新治は安夫をきずつけたくなかったにちがいない。あくまでも相手にはとどめをささずに気づかされた行動を取ったのだ。

もう一つの体験は、「怒り。」である。安夫の行動に堪えていた彼は、その内心の怒りを初江が安夫に強姦されそうになったためにとうとう表面に出してしまったのだ。常に堪えていた彼にとってその怒りは僕たちの想像をはるかに超えるものだったにちがいない。

だがこの二つの体験は彼にとって一生にかかわる大切なものだったのであろう。この体験を乗り越えるこ

とによって彼は男として一回り大きくなったことはいうまでもない。

この物語の作者はどのような気持ちでこの主人公を描いたのであろうか。潮騒のようにさわやかな青年はその後どのような生き方をしたのだろうか。

読み出したらやめられない本

「ぐうたら生活入門」

工業化学科1年 松本祥英

この本のまえがきには、「狸の大王の化け損なった人物、狐狸庵山人は、俗塵を離れ、今日も冥の水音に耳を傾けつつ高遠なる思索にふける……」などと書いてあるが、この本の内容には遠い気がした。しかし、内容をよく読んでみると、多少の違いはあったが、本文の内容を凝縮したようなものだった。この本の筆者は、遠藤周作という人で、まえがきの「狐狸庵山人」は北杜夫が書いたもので、この二つは妙に一致しているのが不思議だった。そんなことがこの本を読むきっかけになった。

さて本の内容に入るが、現在の時点ではまだよくわからない。まだ読みが浅かったせいである。いくつかにわかれているので順序にそって…まず、最初に登場するのは、「ケチ」の話である。また、逆の浪費家のこともある。ケチか浪費家か、の見分け方などである。

筆者に言わせれば、金持ちほどケチで、田舎者ほど浪費家だというのは、ある意味で事実だそう。そう言われてみるとぼくなんかはかなりの浪費家であるということを感じてしまった。

次に、気の弱い奴、亭主族の哀しみ…と続くが、その「気の弱い奴」のところの最初には、読むとむかってくる部分がある。それは、「この「本」の読者の七十五パーセントは「気の弱い奴」だろう」と書いてあり、さらに、「気の強い男はこんな本など読まんからだ」とつけたしてあった。

しかし、ぼくの場合、七十五パーセントの類に入るだろう。もちろん、それに思いあたるところからである。計画をたてても、いざやるとなると、こわくてできない—というときもあった。

この本は、「気の弱い奴」の他にもう一つある。それは、「退屈な人」である。つまり、忙しい人は、読むひまがない、ということだ。ぼくは決して退屈で読んだわけではなく、あくまでも、感想文を書くために読んだままである。

読んでいて楽しいが、中には、怪談話、しかも実際

に筆者が体験したことが書いてあった。そこらにある怪談と違い、体験談なので、夜など読むと、背筋がゾーッとするときがある。

さてこの本で興味をそそられたのは、「催眠術をかけられる」という話だ。まず相手だが、だれでもいいというわけでなく、かかりやすい人を見つけることが第一歩。かかりやすくするために視神経をつかれさせることが第二歩。第二歩が特に重要だと思う。

そこで注意となっているが、相手には、家族の人は選ばない方がよいそうだ。

この本の魅力については、まず、本音で書いてある、ということだろう。キクッとくるときもあれば、反面、笑いが出てしまうときもある。また、読んでいて、窮屈さを感じない。気楽に読める本なのだ。小説もいいのだが、どちらかという、ぼくはやはり、この種類の本が好きである。

この本の題の「ぐうたら生活入門」の「ぐうたら」は、率直に言うと内容から直接には響いて来ない。うそ、ケチ、嫌がらせ、などとまわりくどくあくまでも間接的に書いてある。その辺をよく理解するにはもっと読み返さなくてはいけない。

この本は小説に匹敵するくらい読み返さなければその面白さはわからないのである。

「蟹工船」を読んで

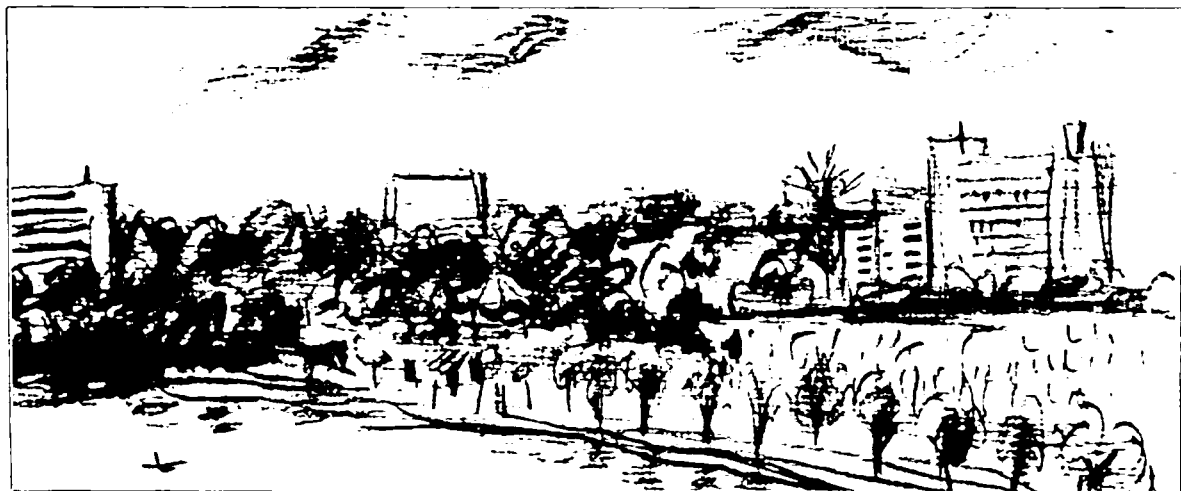
電気工学科1年 田場川 義 裕

蟹工船とは、ソビエト領カムチャッカの領海に侵入して蟹をとり、これを加工して缶詰にするために仕立てられた船である。蟹工船はボロ船であり、そこで季節労働者として北海道で雇い入れられる百姓・坑夫・漁

師・土方・学生・貧民街の少年たちは、すべての人間の権利を剥奪されて、会社の利潤と帝国の「国策」のために言語に絶して虐使される。

蟹工船博光丸に会社から派遣された監督の浅川は友船のSOSを無視し、他の船の張った網を引きあげてその収穫を横取りするなど冷酷でひどい人間だが、彼は自分の成績をあげるために労働者に過酷な残業を強い病人を放置し、「焼き」を入れ、むりやり働かせる。これは今の保障された労働条件からはとうてい想像出来ないことだ。しかし彼らは、三百人もの人間がなぜ少数の浅川達のような者に虫けら同然に酷使されなければならないのか疑問を持ちはじめた。そして、このような非人情的な扱いにたえかねた彼ら労働者は、自然にサボルようになり、そのうちそこから幾人かの代表が現われ、ついにストライキにまで発展した。ストライキは団結の力によって成功するようにみえたが自分たちをソビエトの巡視船から守ってしてくれる自分達の味方だと思っていた帝国海軍の駆逐艦から銃剣を光らせた水兵が乗り込んで来て代表の九人を連れさって行ってしまった。

ぼくはここで作者、小林多喜二が何を言いたかったのか考える。この九人の代表者が連れさらられていく場面から、未組織労働者の団結、国家と財閥との関係の問題を示そうとしていることがこの場面で見える。この時代は、個人の尊重が憲法にも表われている現代とは違っていた。この蟹工船の舞台となっている昭和初期は、わずかな金持ちが多く、多くの労働者を使い、使えなくなったら、そこらのゴミと同じように捨てる。個人の人権が認められず個人は国のためにぎせいになるという半封建的な社会。つまり帝国主義に対して作者は、蟹工船という題材をとりあげ、その断面を鋭くとらえ、写実的な文章で荒涼としたオホーツクの海そし



て、陰惨とした蟹工船の中の労働者達をとらえ、多数の者が少数のぎせいになるということについてある憤りを感じたのだと思う。このことは、必死で労働者が作った缶詰を監督や護衛の駆逐艦の士官が食いちらし、酒を飲み、ばか騒ぎする場面から分かる。これは労働者が作り出したものを国や会社が惜しげもなくつかい、結局苦勞するのは労働者だけということをあらわしているのだらうと思う。そして未組織労働者の団体がしだいに国家や会社と対立した一つの集団になっていくわけだが、これは結局、戦前は軍隊つまり国家にせい圧されて労働者の権利・主張は認められなかった。しかし、この動きは戦後の民主化に大きな役割を果たしたと思う。

このように日本の民主化のための戦いがいかに困難な道をたどってきたかということを知って、ぼくの生き方はこれでいいのかと考える。ぼくたちには自由も権利もある。しかし、この自由と権利のためにぎせいになっていった人々も忘れてはいけない。なにかもはぎとられてしまっても私たちには自由がある。蟹工船の彼らが求めていた自由や権利がある。これだけでも幸せじゃないか、ましてや自分で己れらの命を絶つなどということは、自由を捨てることと同様である。

私達は次の世代をになっていく者として、民主化のためにぎせいになっていった人々もいるということをお忘れずに、一日一日を大切に、次にきたるべき時代のために、一步一步、確実に歩いていきたいと思う。

「地獄の黙示録」

土木工学科3年 鈴木和夫

ベトナム戦争中、ある将校に命令が下ります。それは、優能な軍人であったカーツ大佐の暗殺でした。彼は、任務遂行中突然ジャングルに姿を消し、自分の理想とする国家を作り上げようとしていました。真の自由を求めた国家です。将校は、カーツに興味をいだきはじめます。そして早くカーツにあって見たいような気持ちになっていました。しかし、そこに到着すると、死体、生首がごろごろしている殺伐とした風景でした。カーツは殺人鬼と化していたのでした。

私は、なぜ、これが真の自由を求めた国家なのか考えてしまいました。私は、こう考えました。カーツは、戦争によって、徹底的に恐怖というものを知らされ、その世界にとじこめられてしまった。それでもカーツは、常に自分の理想である自由というものをすてよう

とはしなかった。恐怖の中で、何物にも束縛されない自由を求めたカーツは、真の自由とは、恐怖と友達になること、恐怖を感じない完璧な人間になることだという理想にいたった。だが恐怖を忘れる、恐怖と友達になるなどということは、人間にとっては、ほとんど不可能である。又そのようになったとしたら、人間が人間でなくなってしまったといっても過言ではないでしょう。そこに、なやめるカーツの姿がそれも、逆に自由から遠ざかっていくようなカーツの姿があったのではないかと……。それでもカーツは、理想を実現しようとします。必死になって理想に近づこうとしていたように思えるのです。実際、何がなんかわからない、不規則に言葉をならべたような詩を朗読していたカーツは、まさに、普通の人間ではなくなってしまったようでした。

カーツは、自分の理想を達成したのだろうか。でもこれではカーツがかわいそうです。完璧な人間というにはあまりにも遠すぎる、カーツは、自由をもとめたあまり、くるってしまったように、私には思えたのです。そのような時、将校は、司令をはたすためではなく、カーツを恐怖から解放し、真の自由を与えてやるためには死しかないと考え、暗殺という道を選んだ。祭りの夜、将校は、ついに行動にうつりました。カーツと向かい合う。そこでカーツは、堂々と自分の理想を、異様な雰囲気でも語り、将校は、無我夢中でカーツに、刃をつきさした。ところが、カーツは、死ぬ寸前「恐怖」という言葉を口にしました。まだカーツは、くるってもいなく、又彼の理想の中に出てくる完璧な人間でもなく、恐怖を感じる普通の人間だったのです。

私がこの本を読んで痛感したのは、戦争の恐ろしさです。戦争は、心から自由を求めていたカーツを、恐怖というからの中にとじこめました。そして、くるってしまうほどなやませました。そしてさらに殺人鬼にまでしてしまいました。これほどいたぶっておきながら、結局、死をもってしか彼に自由というものを与えられませんでした。将校は、その地獄までの道のりをたどっていたにすぎなくそしてただ地獄の黙示録をめくっていただけなのかもしれないのです。

人間性の本質にせまる小説

「聖職の碑」を読んで

土木工学科1年 先崎秋実

以前、この物語が映画化されたときに、その映画を

テレビで放送したことがあった。もう三、四年ほど前のことであるが、これを見たときに大変感動したものであった。それから二、三年たって、去年のことだったがある問題集に偶然にもこの小説の一文が載っていた。この時私は、この映画を見て感動したことを思い出すと同時に、感動したとはいいながら、その内容については所々しか記憶していないことに気がついた。

それで一度、この原作を読んでみようと思ったのである。

読後の感想は、一言で言って私が今までに読んだどの小説よりも的確にその場面を想像でき、そしていうまでもなくどの小説よりも感動したということである。

駒ヶ岳登山が決定するまでの経過、それと平行していく人間関係、そして登山中の遭難の部分は圧巻である。そしてその遭難事件後の人達の反応。どのページにも必ず人間性について書かれている。

つまりこの本は「死」という現実がとつても身近に感じることができるのだと思う。一人の少年が急死したことによって周囲の者が混乱に陥る。人間なら人(他人でも肉親でも)が死におちるのを間近に見て恐怖を感じない人はたぶないであろう。そのことによって理性を失ってしまう人もいるだろう。そのことがこの本の中に書かれてあり、結果的に十一名の遭難者を出している。だがこの十一名は理性を失って衝動的な行動に走って死んだのではない。この十一名を死に至らしめたのは十一名を含む集団の中のほんの数名である。この数名が理性を失ったために集団が混乱してしまったのである。結果的にこの理性を失った数名が十一名を殺したことになる。

だから私は理性こそ、命を守り、また他人も助けることのできる最高の救命具であると思う。まさに理性を失ったものを待っているのは挫折である。ただこの本では残念ながら理性を持っている人が死ぬ結果になったが決してその死は無駄な、醜い死ではない。聖人君子的な言い方をすれば美しい死である。ただ死を美しいなどという反発を食うかもしれない。私だって死ぬのは恐いと思う。だから理性によって生きることができると思いたい。

「阿部一族」を読んで

土木工学科1年 愛川克己

「殉死」という言葉に、私はあこがれにも似た気持ちを持っていた。良し悪しは別として、仕えた主人のあひづりア54

とを追って死ぬということが、美しいことのように思えたからである。しかしこの小説を読んで、ただ美しいと簡単に割りきれられるものではないということが分かった。

殉死は確かに主従関係の美しい愛の現れである。が反面非常に合理的な死でもある。隅外はこの微妙なところを客観的に、冷静に実にみごとに描いている。

私は先に殉死は合理的な死である、と言ったが、それは一種の人員整理になると考えたからである。例えば忠利の場合だが、忠利の死後家来が生きていて、城の重職についていたらどうだろうか。光尚に忠誠を誓う武士たちが黙ってしまい。そう考えると、殉死はちょうどいい、新旧入れかえの時になるかもしれないのである。

だが私は決して殉死を肯定するのではない。といって、いちがいに否定もできないのである。現代に生きる私達にすれば、ばからしいことであるが、封建時代ではそうはいかない。殉死も秩序を保つ一手段なのである。

17歳で死んだ長十郎にしても、犬ひきでありながら主君をしたって死んだ五助にしても、私には悲劇とは思えない。彼らは主君のために死んだのだが、主君もまた彼らを惜しみつつ、彼らの死を喜んで受け入れたのである。そこには悲しみなど見られない。主人の死を悲しむ家来と、家来の忠誠を喜ぶ主人とのいたわりがあるだけである。殉死した武士には誇りがある。殉死は武士にとって悲劇ではない。彼らにとって名誉なのである。ではなぜ、この物語の主人公阿部弥一右衛門の死は悲劇なのだろう。阿部一族を破滅に追いやった根本の原因は、忠利に弥一右衛門が殉死を許さなかったことがもとだが、その理由がまたおもしろい。忠利は別にどうということはないのだが、弥一右衛門が好かんのである。上下関係のきびしい封建社会で、主君にうとんぜられた弥一右衛門に対しては、気の毒としか言えない。酷な言い方だが、持って生まれた性格はあきらめるより仕方ないのではないだろうか。その点彼の死にぎわは立派である。非難の中で死んだのだが、生に執着は残していない。

しかし、封建社会は狭い。殉死を許されぬのに死ぬることは犬死だと笑い、また死ななければ非難し、死んでも殉死と認めないのである。結局は主人のために死んだのであり、立派な殉死と言えそうなものだが、そうはいかない。犬死だと人は言う。許されぬのに死んだから弥一右衛門の死は悲劇なのである。封建社会の秩序に反する死だから悲劇なのである。封建社会とは何とみみちい世であろうか。武士とは何と狭い人

間だったのだろう。

武士にもいいところはある。「情は情、義は義」こう割り切る武士の哲学はいい。隅外はこの考え方を阿部家の隣に住む武士、平七郎の行動を通して描いている。

平七郎は、たてこもった阿部一族をみまわって人情の厚さを示しながら、翌日は討っ手として阿部一族を倒しにかかったのである。矛盾しているようだが、これが「情は情、義は義」という理論なのだ。情を見せながら、また一方では武士としての面目もほどこしている。見方によっては、ひきょうとも言えるだろう。だが、いい加減な情におぼれ、ずるずるとした人間関係を続ける私達より、割り切って生きる武士の方が本当であり正直でもある。

封建社会には、なぜ殉死などという風習があったのだろうか。殉死した人々は、一体誰のために生きていたのだろうか。若くして死んだ長十郎、そして五助いや彼らはまだいい。自分が満足して死に、また世間もそれを認めている。問題なのは阿部一族である。反逆者として一族が絶えたのである。誠意をこめて仕えた主君から、彼らはつきはなされたのだ。1つきりの人生が、主君のためにかき回されたのである。弥一右衛門の一生に、自分の意志で自分のために生きたということがあっただろうか。おそらくなかっただろう。でもそれではつまらない。

現代に生きる私達である。封建時代とは違うのだ。せせこましい人生ではなく、大きく生きたい。意志、目標、そして行動と私にしか生きられない人生を送りたい。いい意味で、自分のために生きたいと思う。

だが一方ではこうも考える。自分の一生をささげて惜しくない人がいたら、その人のために生きようと。そしてその人のためには殉死でも何でもしよう。だがその死は封建時代の死とは違う。主君のための死ではなく、自分のための死である。

ファンタジーの世界に遊ぶ

「ライオンと魔女」

電気工学科2年 渡辺 学

つい先日、図書館から借りたある本を読み終えた。ある本とは、佐藤さと子著「ファンタジーの世界」というものである。この中で著者は、児童文学についてこう述べている。

「児童文学とは、子供が読む為の作品ではない。子供にも読める、理解できる作品なのである。」

これを読んで、私は著者に対する共感をしきりにおぼえた。まさしくその通りだと思った。よく、児童文学は子供が読む為の幼稚な作品で、それは純粋な文学に入らない、と言う人がいるが、それは間違っている。上記のような解釈が正しいのだ。何故この様なことを文頭で述べたかという、これから紹介する作品が、児童文学であるからだ。もし、児童文学に対してあやまった考えをもっているのなら、上記の文を読んで考え直してもらいたい。

さて、やたら前置きが長くなったが、いよいよ本題に移ることにする。イギリスの大学教授だった人に、C・S・ルイス、という人がいた。この人は、熱烈なキリスト教信者であった。それがあまりにも強いため、「ナルニア国物語」という一連の作品の根底には、キリスト教の精神が流れている。この事は、後で述べる事にする。「ナルニア国物語」というのは、ルイスの代表作であり、又、優れたファンタジーでもある。「ナルニア」という想像の国が、偉大なライオンのアスランによってつくられ、善と悪の戦いによってついに滅亡する、という大河作品を7つの本に書いている。その一編一編が、独立した作品でもあり、興味を倍増させている。私が読んだのは、この第1作目で「ライオンと魔女」というものである。人間界からやって来た四人の兄妹が、ライオンのアスランを助けて、ナルニアを支配していた魔女を成敗するのである。その巧みな構成と文章力、物語を書くにあたっての豊富な知識には、舌を巻いた。緊迫する場面ではこちらとあちらの様子を交互に織り交ぜながら、臨場感を出している。ライオンのアスランが、自らを犠牲にして死んだ時の、その情景描写、周りのものの心の動きなどが、手にとるようにわかり、読む者をファンタジーの世界に引きずり込んでくれる。一番上の兄のピーターの勇敢さ・行動力・立派な心には、ただただ頭が下がり、三番目のエドコンドは、一度悪に片足を染めながら、自力ではいあがる強い意志を持ち、二番目と四番目のスーザンとルーシーの優しい心一人をいたわる心や自然を愛する心一に、人間味あふれる人物が描き出されている。この4人によって、作者は自分の描いたすばらしい人間像をあますところなく出しきったのではないだろうか。テーマには、善と悪・生と死の対立を打ちだしている。前にも述べたが、この物語の根底には、キリスト教がある。このキリスト教の精神は、「最後のたたかい」という。ナルニア国物語の最後の本で、全面に押し出されている。ここでの話は、その伏線のようなものである。それは、人間の永遠のテーマにも通ずるであろう。

何やらあくびのでそうな事ばかりを書いたが、私は

本は楽しんで読めればそれでいいと思っている。読書感想文ともなると、深く考えざるを得ないが、その他の場合は、そこまで行く必要はない。その点においても、この「ナルニア国物語」は、興味をもって読み進めることのできる作品である。皆様にもぜひ御一読を勧める。

「勝つためには何をすべきか」

機械工学科1年 小林高志

不断の僕だったら本を手にしても中途半端なところで読み飽きてしまうが、この本は読み通し、時間の経つのも忘れさせてくれた唯一の本だった。空前絶後の大記録、日本選手権六連覇の要の人である松尾雄治さんのものの考え方は、とても魅力的で、スポーツに関してだけでなく、人間の生き方という面でも、自分にとってプラスになるところが多かった。また、ラグビーという人間くさく、男くさいスポーツに興味を持たせてくれたのもこの本だった。

—新日鉄釜石の「やる気」ラグビー—

表紙に小さく刻まれている言葉で、初めから終りまでこの言葉で埋め尽くされている。人間を中心に考え、自発的な気持、ゲームや練習に自分から進んで立ち向かう「やる気」というものを真に大切としている。なぜなら、人間を中心に考えることが、結局は、勝つことへの一直線の道になってるからだと思う。これはラグビーだけのことではない。あらゆるスポーツ。そして、不断の日常生活でもそうだと思う。僕にしてみても少しキザだが、やはり、これから長い人生を歩んでいくうえで大切なことだと思うが、正直いって勉強にしてもスポーツにしてもうまくいっていない「やる気」は、各人に平等に与えられた才能であって、あとは自分で磨きあげるものである。—つくづく自分の努力のなさを知らされ反省させられた。

今のスポーツ界では、どこへいっても「管理」ということが重視されるようになってきている。松尾さんはこの「管理」というものが嫌いなようだ。そして、新日鉄釜石のラグビーは、まったくこの「管理」を受け入らない。「勝つ」という最高の目的を手に入れるために、ありったけの物やお金と、人間生活のすべてを投入し、本来のスポーツの素朴な魅力、プライドと喜び、人間中心の考え方を忘れさせている。他人から押しつけられた三時間のノルマ練習よりも、目的意識をもって取り組んだ三十分の「やる気」のトレーニングの方がどれほど

身につくことだろうか。——スポーツの根本的な考えと、「管理」だけが、勝つための唯一の方法でないことや、目的意識をもって取りくむトレーニングから来る喜びや身につく力、そして湧いてくる楽しさを教えられた。

私は、松尾雄治さんの言われる新日鉄釜石の「やる気」ラグビーから、何よりもまず「やる気」の大切さを学ぶことが出来た。それに、この本の完読によって、本を読むことにより、たくさんの知識を得ることが出来、それでまた一つ、大人になっていくことをも収穫として得られたのをうれしく思っている。

「坊っちゃん」を読んで

機械工学科1年 大内丈士

この本はとても楽しかった。「坊っちゃん」は、無鉄砲でけんか早い正義感の強い江戸っ子だ。それゆえにおもしろい事件を次々と引き起こした。

子供の頃、学校の二階から飛び降りて腰をぬかした。なぜそんなことをしたかという、同級生にからかわれて飛べるもんなら飛んでみるといわれたので飛んだんだそうだ。家でおやじに、二階から飛び降りて、腰を抜かすやつがあるかといわれて、次は抜かさずに飛んで見せると答えた。これを読んで笑ってしまった。怒られているのに次は抜かさずに飛んで見せるなどと答えるとは、「坊っちゃん」らしいなあと思った。自分なら、さっさとあやまって逃げるだろう。

大人になって「坊っちゃん」は、四国の中学校の教師になって、ここでもいろいろと事件を起こした。

宿直の当番の時は、生徒にからかわれた。寝どこにバツを入れられたりした。夜中にあばれまわっているのでも真っ暗の中を注意にいくとうまく逃げられ、体中にけがをしたりした。意地になっているとつかれて寝てしまう。とても読んで楽しい。生徒たちは少しずるいと思う。一人を大勢でいたぶるのはひきょうだと思う。いたずらをするにしても、したらしたで罰をうけるべきだと思う。

祝賀会の時、師範と中学がけんかになった。すかさず「坊っちゃん」と「嵐山」が止めに行ったが、石をぶつけられたりなぐられたりしたので、二人ともかっとなって、けんかにまぎってしまう。そして警察で事すべて帰る。これは二人とも素直だと感じた。だれだってなぐられたら頭にくるし、なぐり返そうとする。えらい人はそうはしないが、二人は何も考えずになぐり

返した。無鉄砲でけんか早いのもそのせいだと思う。このことが原因で「嵐山」が学校をやめることになった。教頭と野田の陰謀である。だから二人に鉄拳制裁をする。そして学校をやめ東京にもどる。はっきりいって教頭と野田に鉄拳制裁を加えた時は、胸のすくような思いであった。二人は表はえらい人、紳士で通っているが、裏では悪どいことをしている。しかし、証拠を残さないのを読んで、はらがたってくるが、すっきりした。

「坊っちゃん」を読んで非常に楽しかった。こんな人が身の周りに一人でもいたら、とっても楽しいだろう。無鉄砲でけんか早い、正義感の強い江戸子の「坊っちゃん」。このような人に生きてるうちに、めぐりあえたらいいと僕は心からそう思った。

読書ア・ラ・カルト解答

- 1 半村 良 = 清野平太郎。東京生れ。両国高校卒業後、二十数種の職業を転々として、推理作家として立つ。彼は、イーデス・ハンソンの大フ

ァンなので、良(イーデス)半村(ハンソン)をひっくり返してつけた。

- 2 佐賀 潜 = 松下幸徳。本職は弁護士の売れっ子推理作家だったが、昭和45年死亡した。「俺の犯人はサガセンだろう」という意味でつけた。
- 3 久生十蘭 = 阿部正雄。「食うとらん」としゃれた。
- 4 直木三十五 = 植村宗一。本名中の「植」の字を「木」と「直」に二分し、名前は、三十一才から一つ年をとるごとに「三十二」・「三十三」……と変えて行って「三十五」才で止まった。全く人食った話である。
- 5 大仏次郎 = 野尻清彦。実は、英文学者で、星にくわしい野尻抱影の実弟である。鎌倉の大仏様の裏に住んでいたことからこう名のつた。
- 6 司馬遼太郎 = 福田定一。中国の史家司馬遷に敬服していたので、「司馬」とし、それに遼原(野原を焼くこと)の「遼」をとってつけた。全く、遼原の(火の如く)広がり、読者大衆を獲得し来た。ペンネームの御利役も多分にあったのかもしれない。

新 着 図 書 目 録

☆印は図書館 他は各教官の研究室に所在するものを分類別受人順に記載

総 記

朝日新聞縮刷版 昭和59年1月	朝日新聞社☆
福島民報縮刷版 昭和58年11月~12月	福島民報社☆
日本写真年鑑 昭和59年版	日本写真新聞社☆
人類の知的遺産 77 ザルトル	講談社☆
東洋文庫 430 明治日本体験記	平凡社☆
歴史の道 1 奥州道中 相馬街道 羽州街道 二本松街道 米沢街道 福島県教育委員会中	民友社思想文学叢書
2 山路愛山集一	三一書房☆
広瀬武夫全集 上下巻	講談社☆
志賀伝吉 夏井川	技術評論社☆
吉田清計 スポーツ人風土記(福島県)	道和書院

哲 学

内村鑑三全集 40 雑纂 年譜 題名索引	岩波書店☆
内村鑑三 後世への最大遺物テンマルク國の話	岩波書店☆
小野沢精一 中国古代説話の思想史的考察	汲古書院
豊田栄 マルコ福音書註解1~3	みずさ書房
宗教改革著作集 3 ルターとその周辺1	
5 ツプィングリとその周辺6	教文館☆
門脇清 日本基督教書簡史	新教出版社
石田一良 カミと日本文化 思想読本 観望	ベリかん社☆
〃 〃 運元	法蔵館☆
〃 〃 空海	同
〃 〃 法然	同
〃 〃 西行	同
湯浅泰雄 歴史と神話の心理学	思索社
M. ヘンゲル ユダヤ教とヘレニズム	日本基督教団出版局

講座現代の心理学

6 性格の科学

小学館☆

歴 史

日本分県地図地名総覧 59	人文社☆
東京都地図	同 ☆
読める年表	
1 古代奈良篇	自由国民社
2 平安篇	同
3 鎌倉室町篇	同
4 戦国織豊篇	同
5 江戸篇 I	同
6 〃 II	同
7 明治大正篇	同
8 昭和篇	同
日本歴史地名大系 14 神奈川県の地名	平凡社☆
角川日本地名大辞典 12 千葉県	角川書店☆
千坂徳綱 新地名の研究	古今書房
橋本真太郎 漢民族と中国社会	山川出版
横田清昭 中国時代の東西文化交流	雄山閣

日本の自然 100選 朝日新聞社
 安東伸介 イギリスの生活と文化事典 研究社
 M. トルミー ビューリタン革命の担い手たち ヨルダン社
 塩田庄兵衛 戦後史資料集 新日本出版社
 嶋田豊平 イスラムの世界 日本放送出版協会

社会科学

豊原恒男 改訂新版職業適性 講談社
 韓国北朝鮮総覧 原書房
 O. Eクラップ 情報エントロピー 新評論社
 H. ヘンダーリン エントロピーと工業社会の選択 高鳴社
 ジュレミ・リフキン エントロピーの法則Ⅰ、Ⅱ 祥伝社
 そのときどきの教師編 新評論社
 浅見定雄 にせユダヤ人と日本人 朝日新聞社
 ラルフ・レキニー 多目問題解決の理論と実例 企画センター
 日本教育年鑑 日本写真新聞社
 丸山肇雄 証言第二次臨闘 新地書房
 小川和男 連連の対外貿易と日本 時事通信社
 森橋茂樹 連連経済最新事情 東洋経済新報社
 ゲオルギー・Aアルパドワ 連連の立場 サイマル出版会
 マーシャルゴールドマン 危機に立つソ連経済 時事通信社
 明日の都市1〜20 中央法規出版
 ふるさとの伝説
 1 北海道 大地の折り
 2 東北 みちのく夢幻
 5 中部 山の息吹き
 6 北陸 北国の語り
 7 近畿 浪浪と信仰
 8 京都 王朝人の哀歌
 9 奈良 神々の世界
 10 中国 風土記の国
 11 四国 通路の里
 12 北九州 語り部たちの声 小学館
 黒田勝弘 韓国社会をみつめて 垂起書房
 宮田登 女の重力と家の神 人文書院
 小林忠雄編 最新改訂版 公共用地の取得に伴う損失補償基準要綱の解説 近代図書
 改訂版 公共補償基準要綱の解説 同

自然科学

経崎雄 ガン病棟のカルテ 新潮社
 宮田親平 科学者たちの自由な素顔 文芸春秋社
 武藤勝彦 地図の語 愛地書館
 田中義勝 科学論文の書き方 実業房
 小出昭一郎 解析力学 物理入門コース2 岩波書店

和達三樹 物理のための数学 物理入門コース10 同
 下間和一 技術文化史12講 森北出版
 高塚清 生活の中の科学技術 山海堂
 田中尚夫 公理的集合論 培風館
 M. デービス 超準解析 同
 西山隆造 図解基礎の化学実験法 IⅡⅢⅣ オーム社
 Charles Compton 化学Ⅰ その本質の理解
 化学Ⅱ 人間社会とのかかわり 東京化学同人
 雨農年表 第30回 昭和57年 日本河川協会
 千原貞郎 癌と免疫増強 講談社
 食品中の食品添加物分析法 同
 カール・サイモントン がんのセルフ・コントロール 創元社
 大塚齊之助編 金属タンパク質の化学 講談社
 近角聡信 日常の物理学 東京書籍
 小野正喜他 高校生のための数学 1 入門 帝國書院
 同 高校数学入門、下 同
 道脇義正 工科のための線形代数入門 東京図書
 同 “ ” 演習数積分 同
 数学大公式集 丸善
 カールFガウス 誤差論 紀伊国屋書店
 岩堀茂隆 2次行列の世界 数学入門シリーズ4 岩波書店
 山本幸一 順列組合せと確率 “ ” 5 同
 賢尾泰俊 日常のなかの統計学 “ ” 6 同
 高尾利治 理工系における効果の事典 電気大出版局
 原島昇 読、物理教育覚え書き 実業房
 飯下信 計算物理1 地人書館
 先生と生徒のための物理実験 共立出版
 G・Wright レーザを使った基本実験 同
 若山一夫 理工系物理学のはじめ コロナ社
 マックス・ヤンマー 空間の概念 講談社
 鈴木米三 植物生化学 理工学社
 内藤博 栄養生化学 実業房
 太田次郎 絵とき遺伝子工学入門 オーム社
 小林博 絵とき遺伝 講談社
 松原謙一 遺伝子操作 共立出版
 高木康敬 “ ” 実験法 講談社
 田島弥太郎 化学物質の突然変異性検出法 同
 田島弥太郎 環境変異原実験法 同

水本久夫 ラプラス変換入門 森北出版
 バトリック・J・ローチュェ コンピューターによる流体力学上、下 構造計画研究所
 高橋亮一 同演習 同
 D・ラップ 理工学のための統計力学入門 ブレイン図書
 松平升他 物理学Ⅰ、Ⅱ 培風館
 旭山季一 物理化学 演習と解法上、中、下、 内田老鶴閣新社
 M・Prupton 表面の物理 丸善
 田中渥 実用的な科学論文の書き方 実業房
 江崎玲奈 創造の風土 読売新聞社
 福山克 数理論理学(現代数学レクチャーズB-6) 培風館
 I. M. シンガー トポロジーと幾何学入門 同
 島山洋二 多様体入門(数学ライブラリー41) 森北出版
 竹之内緒 フーリエ展開(使える数学シリーズ6) 秀潤社
 ベ・ゼ・ブリーフ 数値解析のための関数解析Ⅰ 大一総合出版
 S. ロス 初等確率論教程 現代数学社
 田野修吉 多様体の微分幾何学 実教出版
 志村利雄 確率論入門(基礎数学選書16) 実業房
 竹内外史 リー代数と素粒子論 同
 広中平祐他 解析空間入門 朝倉書房
 田中尚夫 公理的集合論(現代数学レクチャーズB-10) 培風館
 河井社一 代数幾何学(現代数学レクチャーズB-5) 同
 千笹克祐 関数解析(“ ” B-9) 同
 斉藤孝一 工科系のための確率と確率過程 ワイエンス社
 中井三留 関数解析 同
 笠原章郎 自然数から実数まで 同
 柴田義貞 正規分布 東京大学出版会
 竹内啓 2項分布とポアソン分布 同
 金子見 超関数入門上、下 同
 斉藤正彦 数学研究の最前線 日本評論社
 山田浩 代数曲線のはなし 同
 佐武一郎 リー群の巨 同
 カール・F・ガウス 誤差論 紀伊国屋書店

壬生雅道
位相群論概説 岩波書店
J・P・セーブル
数論講義 同
飯筑俊郎
有限群と有限幾何 同
コルモゴロフ
函数解析の基礎上、下 同
栗原俊郎
論理数学1 共立出版
J・N・クロスリー
現代数理論理学入門 共立出版
伊藤由文
初等代数幾何学 同
中井喜和
可換環と微分 同
I・スチュワート
ガロアの理論 同
Paulo Ribenboim
フェルマーの最終定理13講 同
リブシュッツ
確率 マグロウヒル好学社
リブシュッツ
集合論 同
バウムスラグ
群論 同
飛田武幸
ガウス過程 紀伊国屋書店
小泉正二
テータ函数 同
飯高茂
テカルト精神と代数幾何 日本評論社
竹内外史
直観主義的集合論 紀伊国屋書店
G・Lラム、Jr
ソリトン理論と応用 培風館
河島信樹
宇宙プラズマ核融合宇宙の創造と再現に挑む 工業調査会
森下郁子
ダム湖の生態学 山海堂
海洋工学ハンドブック コロナ社
田崎忠良
環境植物学 朝倉書店
村上陽一郎
技術思想の変遷 同
川上正光
科学と独創 同
猪野久義
現代の地球科学 同
山根登
微量元素 産業図書
M・マイゼンハッド
環境放射能 第2版 同
H・Dホランド
大気、河川、海洋の化学 同
医療、環境、災害に関する27年前の雑誌
文献目録 I、II 日外アリッシュ
Higher transcendental functions 1-3
Krieger
N・W・Lepp
Effect of heavy metal pollution
on plants 2
Applied Science
G・H・Müller
Logic Symposia Hakone 1979
1980 Springer
A・Dold
Algebres d'Opérateurs
Springer
T・Jech
Set theory
Academic Press

E・J・Kirkowski
Environmental mutagenesis,
Carcinogenesis, and plant
biology 1-2. Praeger
J・B・Russell
General chemistry
Mcgraw Hill

工 学

松田亀松
全員参加の職場活動 技術評論社
山下義美
全員参加の提案活動 同
吉田亨
金属破断面の見方 日刊工業新聞社
佐多敏之
工業材料 森北出版
戸川隼人
FM-7 BASIC サイエンス社
北原拓也
CP/M-86入門 CQ出版社
ねじからマイコンまで最新機電用語辞典 技術評論社
大川善邦
マイクロコンピュータ演算プログラムの作り方 産業出版
疑問にこたえる機械の電子ロニクス
1-3 技術評論社
疑問にこたえる機械の油圧上下 同
日、英、中、独対照工業用語辞典 同
テータ活用ハンドブック 機械編 同
塩見弘
トラブルフリーをめざす信頼性保全性の考
え方と進め方 同
B・Aフィンレイソン
量みつき検査法と変分原理 培風館
石田晴久
パーソナルコンピュータの使い方
共立出版
対馬勝英
パソコン・ツール 同
沼倉三郎
測定値計算法 森北出版
戸川隼人
続マイコンによる有限要素解析 培風館
神谷純生
境界要素の基礎 同
同 有限要素法と境界要素法 サイエンス社
榎岡正人
マイコンによる境界要素解析 培風館
基本電子回路 電気学会
A・Jハーバート
工業英語入門 創元社
ノーマンG・エインズブラチ
超LSIエレクトロニクス基礎(原理)編 I、II
現代工学社
同 “ “ 製造技術編 I、II 同
同 “ “ 応用編 I、II 同
同 “ “ 政策編 同
化学装置便覧 丸善
河密信郎
エントロピーと工業社会の選択 海鳴社
堀田敦
資源物理学入門 日本放送出版協会
同 石油と原子力に未来はあるか 亜紀書房
一色尚次
わかりやすい熱力学 森北出版
同 わかりやすい熱と流れ 同
松永省吾
エンタルピー、エントロピーの基礎 パワー社

北山直方
図解熱力学の学び方 オーム社
同 図解熱力学の学び方 同
同 図解演習熱力学 同
山本賢三
世界のエネルギーと原子力開発1984/84 丸善
技術資料歯車強さ設計資料 日本機械学会
小川深
機械設計システムのプログラミング 森北出版
V・Pコガエフ
信頼性設計の基礎 同
セレンセンコガエフ
機械要素強度計算便覧 同
国井大蔵
移動速度論 工学基礎講座 23 培風館
塚本正文
BASIC数値計算と図形処理 森北出版
新版空気機械工学便覧 基礎編 コロナ社
 “ “ 応用編 同
機械因素送風機圧縮機 日本機械学会
南誠 だれにもわかる空気圧技術入門 基礎編、
応用編 オーム社
中経徳三郎他
送風機、圧縮機 産業図書
小寺沢良一
フラクトグラフィとその応用
日刊工業新聞社
奈良久他
情報処理演習 培風館
北川英夫
フラクトグラフィ破壊力学と材料強度講座
15 同
中山隆池
例題形式FORTRANプログラミング
共立出版
中村明子
詳解FORTRAN演習 同
町田輝史
図解材料強さ学び方 オーム社
兵器生産の現場 朝日新聞社
押田良輝
送風機技術読本 オーム社
基本機械設計図集 日本機械学会
古川光 生産工学 最新機械工学シリーズ 13
森北出版
室田武 エネルギーとエントロピーの経済学
東洋経済新報社
一色尚次
新蒸気動力工学 新しい機械工学 2
森北出版
三好迪男他
トンネルII 新体系土木工学 71
技報堂出版
中瀬明男
海洋土質 “ “ 84 同
C・Aブレビア
有限要素法の基本と応用 ブレイン図書
同 コンピュータによる工学問題の計算法
同
T・Rトーカー
構造力学とエネルギー原理 同
田中正隆
境界要素法—基礎と応用 丸善
宗孝 一歩先をいく 機械材料えらび
技術評論社

毛利正光 土木計画学 理論と実際 国民科学社
 田中敬一 レーザと計測 共立出版
 流量年表第35回 昭和57年 日本河川協会
 M・スレッパー バイオマス 共立出版
 8080/8045アセンブリ言語プログラミング
 グマニアル インテルジャパン社
 大野篤美 新釘金属凝固学 地人書館社
 金属物性入門 金属物性基礎講座1 丸善社
 統計熱力学 " " 2 同社
 権敏 冶金実用数学 科学技術社
 武田正一郎 データのまとめ方と使い方の品質管理の基礎
 実務 技術評論社
 大坪博史 全員参加の安全作業 同社
 小野茂 " " コストダウン1E 同社
 佐田哲男 " " 省エネルギー活動 同社
 事例20で知るマイクロコンピュータの活動
 法 同社
 テータ活用ハンドブック 工作編 同社
 コンクリート構造の限界状態設計法指針(案)
 土木学会社
 松岡徹 図解レーザー読本 オーム社
 山中千代衛 レーザ光線 東海大学出版会
 稲場文男 レーザ工学 東京電機大学出版会
 シュナイダー おもしろいレーザー光 東京図書
 矢島悦次郎他 若い技術者のための機械金属材料 丸善
 長崎晋一 集合組織 同
 最新ファインセラミックス技術 工業調査会
 藤井信生 アナログ電子回路 昭晃堂
 中東明美 マイコンによるデータ整理 培風館
 岡崎義則 単位円-クロソイド表 山海堂
 飯吉精一 ある土木者像 いまこの人を見よ
 技報堂出版
 室田武 君はイントロビーを見たか? 創拓社
 植田敦 石油文明の次は何か 農村漁村文化協会
 塚本正文他 BASIC 数値計算と図形処理
 森北出版
 布施洋一 道路VI新体系土木工学65 技報堂出版
 土木計画学研究論文集1 講演集6
 土木学会
 昭和59年度電子通信学会総合全国大会講演
 論文集分冊1~10 電子通信学会
 内田信二郎他 核融合とプラズマの制御 東京大学出版会
 21世紀の水需要 山海堂
 谷村喜代司 水資源の開発 同社
 岡崎義則 道路中心線の設計 同社
 福岡正巳編 新しい耐震設計入門 近代図書
 パソコンによる土木構造物の設計計算プロ
 グラム第1集 山海堂

住友栄吉 マイコンによる1集土木実用プログラム入
 門 近代図書
 多田彰 " " 汎用土木プログラム入門 同社
 昭和59年版測量士、測量士補国家試験受験
 テキスト 日本測量協会
 測量士、測量士補国家試験科目別模範解答
 集(昭和52~57年) 同社
 松屋新一郎 土質安定工法便覧 日刊工業新聞社
 大西弘 新編図解グラウト便覧 ラテイス
 三木幸蔵 土木技術者のための岩石、岩盤図鑑
 鹿島出版会
 地下貯油施設技術指針(案) 土木学会
 土木公式例題 500選 近代図書
 石川啓 誰にでもわかるTQCのはなし 鹿島出版会
 小林勲 土木技術者のTQC入門 近代図書
 ギャラガー 有限要素解析の基礎 丸善
 同 有限要素解析問題と解答 同
 Larry J. Sengerling 応用有限要素解析 同
 川端康洋 " " 演習 同
 最新建設工事技術者のための法令集 東洋書店
 石川六郎 システムズアプローチによる工事管理 鹿島出版会
 小川豊 イラスト現場のための土木雑学 山海堂
 ウェルポイント工法便覧 理工図書
 土木技術者のための土木工学 土木一般編
 土木施工管理技術研究会
 天野博正 環境科学 技報堂出版
 本多修郎 技術の人間学 朝倉書店
 大北忠男 新版環境工学概論 同
 鈴木武夫 大気汚染の機構と解析 産業図書
 M・アイゼンハット ヒューマンエコロジー 環境、技術、健康 同
 同 水汚染の機構と解析 同
 Ia: J・ティンズレイ 環境汚染の化学 同
 福田基一 環境工学概論 培風館
 J. J. Duderstadt Principles of Engineering Wiley
 Kleinlogel Rahmenformeln Wilhelm Ernst
 産 業
 渋谷政夫 土壌汚染の機構と解析 産業図書
 芸 術
 岡倉覚三 茶の本 岩波クラシックス57 岩波書店

古山俊一 シンセサイザーの科学 講談社
 深井晋司 ベルシャ美術史 吉川弘文館
 久野健 日本美術史要説 同
 嘉門安雄 西洋美術史要説 同
 宮沢昭 インド美術史 同
 佐和隆研 仏像図典 同
 音楽大辞典 1~6 平凡社
 音楽史大図鑑 音楽之友社
 全集日本の古寺11 集英社
 昭和写真員会仕事
 1. 秋山庄太郎 2. 白川 義典
 3. 林 忠彦 4. 大竹 省二
 5. 土門 拳 6. 緑川 洋一
 7. 三木 淳 8. 中村 正也
 9. 奈良原一高 10. 植田 正治
 11. 白藤 史朗 12. 樋村 隆正
 13. 前田 真三 14. 入江 善吉
 15. 栗松 照明 朝日新聞社
 阪部正夫 わかる体育理論 日新出版
 山本邦夫 埼玉県剣客列伝 遊戯社
 岡野功他 バイタル柔道 投技編 寝技編
 日貿出版社
 小谷澄之 柔道五段 成美堂出版
 全解日本剣道形 武道教本2
 スキージャーナル
 川村植三 写真で学ぶ柔道技の練習法
 ベースボール・マガジン社

語 学

ジョージ・P・マッカラム 英会話の洒落タイティオム 上、中級編
 朝日リビングニュース社
 鈴木修次 数の文学 東京書籍
 新和英大辞典第四版 研究社
 漢語文典裏書 2、4 成古書院
 永嶋大良 英米の辞書 研究社
 外国語としての英語の教授と学習 同
 市河三喜 世界言語概説 上下巻 同
 田崎清忠 田崎のアメリカンライフ辞典 同
 日本人語【和英対訳】 東洋経済新報社
 新村出編 広辞苑 第三版 岩波書店

文 学

川島重成 ギリシャ悲劇の人間理解 新地書房
 萩谷村 枕草子解題 1~5 同朋舎
 目崎徳衛 思想談本 西行 法蔵館
 中国学論集 汲古書院